紹介

デジタル学園祭「全国情報教育コンテスト」

京都精華大学 教授
一般社団法人デジタル人材共創連盟代表理事　鹿野　利春

1．はじめに

全国の中学生や高校生が，誰でも気軽に応募できて，自分のアイデアや作品を発表できる場があったらいいなという考えは，誰もが抱くのではないだろうか。一般社団法人デジタル人材共創連盟（以下，デジ連という）は，デジタル学園祭「全国情報教育コンテスト」（以下，全情コンという）を，そういった役割を果たす大会として主催している。１年間の成果を発表するのに相応しいように，エントリー締め切りは１月中旬，最終審査会は３月中旬としている。ぜひ，多くの生徒に発表の機会を与えていただきたい。

全情コンURL（https://zenjyocon.jp/）

2．開催の背景

現行学習指導要領が実施され，小学校から全員がプログラミングなどに取り組み，中学校では技術・家庭科の技術分野の内容が高度化し，高等学校では「情報Ⅰ」が必履修科目となった。「情報Ⅰ」は大学入学共通テストにも導入され，より高度な「情報Ⅱ」も全国で教えられている。総合的な学習の時間や，総合的な探究の時間でも情報分野の取り組みが行われ，デジタル関連の部活動，個人や学校外のデジタル活動も活発に行われている。中学・高校の生徒のデジタルを活用した問題発見・解決能力は格段に向上した。

そのような中，経済産業省は，「Society 5.0を見据えた中高生等のデジタル活動支援の在り方提言」（2022. 3. 31）の中で，中学生，高校生等による多様なデジタル関連活動を「中高生等のデジタル関連活動」と総称し，そのモチベーションを維持・向上するための目標となる大会の開催が必要であるとした。デジ連は，その提言を社会実装する団体として設立し，全情コンを提言で必要とされた大会として開催している。

3．これまでの歩み

全情コンは，１回目から文部科学省，経済産業省の後援をいただき，２回目から文部科学省共催となり，DXハイスクール事業の成果発表の場としても期待されている。2025年度開催の３回目は日本情報科教育学会と連携して全国を４つのエリアに分けて審査を行うまでになった。

4．全情コンの特徴

(1) 生徒の身近な目標になる

生徒が何かを作る際には目標があった方が良い。教科の授業でも，総合的な探究の時間でも，部活動などでも，それは変わらない。本コンテストは生徒の身近な目標になるものである。

(2) 参加しやすい

アイデアだけでもエントリーでき，他の大会で入賞した作品でもブラッシュアップして応募することができる。個人や学校が異なる生徒で形成されたグループでも応募できる。該当年齢であれば，学校に行っていなくてもかまわない。もちろん国籍も関係ない。応募はエントリーシートに必要事項を書き込むだけである。

(3) 全国につながる

都道府県大会（予定）では賞が授与され，ブロック大会では企業賞なども授与される。最終審査会では，審査員も学会，産業界，行政から専門家が参画し，生徒に直接質問したり，アドバイスし

たりする。審査員等との交流の時間も設けられている。

(4) 公式に認められており賞も多い

文部科学省共催かつ経済産業省後援であり，多くの企業にも参画いただいている。DXハイスクール事業の成果発表の場としても位置付けられており，公式に認められているといって良いだろう。これは，生徒の達成感を満たすとともに，確かな実績として就職や進学の際に提出する書類に記載することができることを意味している。全国を４つのブロックに分けて審査を行い，ブロックごとに30程度の賞が準備されている。最終審査会でも，文部科学省を含む10程度の賞を出すので，受賞の機会は多いと言える。

５．大阪関西万博EXPOでの発信

2025年は，７月19日・20日の両日，大阪関西万博EXPOで「デジタル学園祭2025」を開催し，第１回・第２回の全情コン入賞者を招いて，大学生，若手クリエイターと共に作品を展示した。

会場では，経済産業省の未踏事業修了者の展示，関西テック・クリエイターチャレンジ修了生の展示，さくらインターネットやMIXI，i-RooBO Network Forumなどの最先端テクノロジーの展示ブース，自作ゲームコンテストのセミファイナルなども行われ，全情コンの先に広がる世界との交流が自然に行われた。来場者も２日で１万８千人を越え，文字通り世界に向けて成果を発表することができた。

優秀作品には，７月21日に大阪駅近くのグランフロント大阪でデジタル学園祭アワードの授賞式も行った。これには，全情コン入賞者も参加し，その後に行われた未踏事業の説明会にも参加した。より広い世界を見て，その入り口に触れることで，生徒の成長の可能性はさらに大きくなる。

図１　会場入り口

図２　全情コン入賞者の展示

図３　i-RooBO ワークショップ

図４　未踏事業の展示

６．これからの全情コン

2026年度は，４回目の開催になる。2025年度は全国を４つのブロックに分けて書類審査を行ったが，2026年度は会場での開催も検討している。また，都道府県予選の開催についても進めていく予定である。より身近で学校教育に馴染み深い大会として定着させていきたい。

一方，大阪関西万博EXPOで開催したデジタル学園祭は，2026年度は大阪で秋に開催することを検討している。こちらの方は，大学生や社会人にも対象を広げ，より高度なものになっていく。そこに，全情コンの入賞者が参加することで刺激を受け，より大きな舞台を目指すようになると考えている。デジ連の役目は，このような舞台を準備すること，企業と連携した教材作成と供給，講師や情報の提供といった教育のインフラを創っていくことである。これらを通じて，情報教育が向上するとともに，デジタル人材の育成につながり，より良い社会の形成に貢献できると信じている。全情コンを教科や総合的な探究の時間，部活動などの目標に設定し，多くの生徒の参加をお願いしたい。

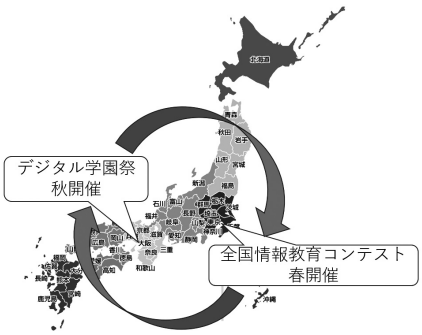

図５　これからの開催概要